

令和7年度 奈良市立辰市こども園 研究実践概要

園長名 田中 典子
全園児数 158名

1. 研究主題

「おもしろそう」「やってみたい」「なんだろう」と生き生きと遊びや生活をする子どもをめざして
～心を動かすきっかけとなる環境とは～

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

昨年度の取り組みで、改めて環境の大切さを学び、さらに子ども達が心を動かすきっかけとなる環境を探っていきたいと考えた。子どもが主体的にもの、ひと、ことにかかわって遊ぶ環境の工夫や援助の在り方を考えていきたい。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもの姿から見えてくる「心を動かすきっかけとなる環境」を職員間で話し合い研究を深める。

②研究の重点

- ・遊びや生活の中で「おもしろそう」「やってみたい」「なんだろう」と心を動かしている場面について見取り、そこから見られる心を動かす環境について考える。
- ・子どもの育ちや学びから、気づいたことを話し合い着目する視点を明確にする。

③活動の方法

- ・各年齢の園内研修や写真の見取りを通して「自分が考えた子どもが心を動かしたきっかけ」と「他者が考えた子どもが心を動かしたきっかけ」を語り合い、多角的な視点で子ども理解を深める。また、会議に参加しにくいパート職員に事前に行ったことを聞いたり、乳児クラスと幼児クラスの職員同士が語り合ったりするようにし、よりいろんな意見を出せるようにした。
- ・子どもの姿や心の変容など写真やエピソードがわかるようなシートを作成した。話し合いで出た意見を参考にし、その後気づきや学びをまとめた。全職員で共有するために、シートを活用し紙面報告しあった。



歳児 組 年 月 日 ()	
エピソード	

(心が動いたきっかけ)	(他者から見た心が動いたきっかけ)
写真	
気づきや学び	

0歳児 6月

鏡に写っているものを見ていると、振り返った保育者と鏡越しに目が合った。するとニコッと笑って上下に揺れたり、両手で鏡を叩いたりするA児。その後「Aくん」と名前を呼んだり、保育者が一度鏡の中から消え「いないいないばあ」と鏡越しに目を合わせたりすると、また揺れたり手を叩いたりして笑うことを繰り返し楽しんだ。

<心が動いたきっかけ>

- ・鏡に映っている保育者を見つけたこと
- ・鏡に全身が写って面白いこと



<他者から見た心が動いたきっかけ>

- ・保育者との安定した関係
- ・保育者が近くで共感してくれる安心感
- ・繰り返しが楽しい

<考察>

特定の保育者がそばにいることで安心し穏やかな表情を見せている。これは日々の関わりの積み重ねによって形成された愛着関係による情緒的に安定した姿である。安心して過ごすことで、周りへの興味関心をもつことにつながっていくと考える。改めて、特定の保育者が子ども一人一人にとって安心して過ごせる存在であることの大切さを学んだ。

1歳児 10月

透明なプラスチックのコップに寒天を入れることを楽しんでいたA児。コップが柔らかく、力を入れて持つと寒天がコップのふちから溢れだし、少し驚いた表情。「グニュってなったね」と保育者も驚いた顔で声をかけると、ニコッと笑い嬉しそう。保育者の顔を見ながら、またグニュ！グニュ！その度に驚く保育者の様子を見て笑い、溢れだした寒天を見て、嬉しそうに足踏みしていた。

<心が動いたきっかけ>

- ・保育者が見てくれていて、表情や言葉で反応してくれること
- ・押すと溢れだす感触や感覚
- ・目で見ると、視覚的な面白さ



<他者から見た心が動いたきっかけ>

- ・安心でき、楽しさを共有してくれる保育者の存在
- ・一人一人に合わせた反応
- ・思わず触ってみたいくなる素材

<考察>

思わず触ってみたいくなる素材や十分な量等の物的環境だけでなく、遊びの場が子どもにとって安心できる場所となるのが大切なのだを再確認した。そのためには、そばで保育者がその時の子ども一人一人の小さな心の動きに反応し、言葉だけでなく表情やしぐさで子どもの思いに温かく応えることが重要である。安心できる保育者の存在が、自ら環境にかかわって遊ぼうとする姿に繋がっている。

2歳児 5月

A児がテントに吊るしたホースから垂れてくる水を見て様々な容器を持ってきては、水を溜めることを楽しんでいた。容器に溜まった水を、初めは地面に流していたが、今度は近くの台の上に流した。その水がゆっくり傾斜の低い方へと流れていく。その時、保育者が「水どこに行くのかな」と言うのを聞いて、A児は「え？」と言いながら水の流れを辿って行った。台の端にたどり着いた水はポタポタと乗になって落ちている。A児はしばらくじっと覗き込み「先生、雨になっているよ」と言った。

<心が動いたきっかけ>

- ・傾斜をつけ、台を置いたこととA児が台に水を流した時に保育者が声をかけたことが、合わさったこと



<他者から見た心が動いたきっかけ>

- ・日頃の遊びの中で何度も楽しさを共有している保育者が言った言葉

<考察>

心が動くきっかけは、物的環境のみでなく、声掛けを含めた保育者の存在、人的環境が重要なことが分かった。子どもは信頼できる保育者と一緒に五感を使って遊ぶことで、感覚を楽しみながら想像力を育んでいる。保育者が常に子どもの興味や関心の芽にアンテナを張り、子どもの姿、つぶやき、言葉、しぐさ、表情などに表れる心の動きをくみ取っていくことが大切である。

3歳児 9月

色水を作り、ペットボトルに入れて楽しんでいたA児。そのボトルを製作コーナーに持っていき、キラキラシールを貼って飾り付けを始めた。そのうちに、水がこぼれるかもしれない、と気づき、ボトルにテープを何重にも巻き付け始めた。保育者はA児がテープが重なっていく様子を楽しんでいる姿を見て、テープの分量や使い方を伝えることはせず、そばで見守った。満足いくまでテープを巻きつけたA児は、ボトルを窓際に置き、光が入る様子を見ていた。

<心が動いたきっかけ>

- ・水がもれてこないように、テープで蓋をしようと思いついたこと



<他者から見た心が動いたきっかけ>

- ・きっちり留めようとするうちにテープを出すのが楽しくなってきたこと

<考察>

使ってみたいと思える素材が十分に揃っていること、また、やりたい活動をとことんできること、見守られている安心感があることが、「モノとのかかわり」と「目的」を行ったり来たりする姿になった。保育者が環境を整え、その子どもに応じた声かけや見守りを意識する事によって、子ども達は生き生きと遊ぶことがわかった。

4歳児 6月

ブルーシートの下にタイヤがありできた穴に「水入れたらいいやん」とバケツやジョウロ、鍋、お茶碗などで友達と一緒に水をためて遊んでいた。水がたまと足をそっと入れたり勢いよく水しぶきをあげたりし「冷たい！」と水の冷たさを感じていた。保育者も入って「ほんとや、冷たい！」と叫ぶと喜び、一緒に足を動かすと水が「温かくなった」と共感しあっていた。その様子を見て友達も砂場に穴を掘り、ホースの先を穴に向けジョウロで反対から水を入れ、水が出てくるまで繰り返し遊んでいた。

<心が動いたきっかけ>

- ・偶然できたいくつかの穴とタライの水



<他者から見た心が動いたきっかけ>

- ・いろいろ試すことができる道具が身近に揃っていたこと
- ・共感してくれる保育者の存在
- ・近くで遊ぶ友達の存在

<考察>

やりたいという思いが芽生え遊ぶ中で、それが理にかなってなくても、繰り返ししていくことでできるようになっていく過程が大事である。保育者は子どものつぶやきをひろい、夢中になって遊べる環境を用意し、一緒に遊んでいくことで子ども理解が深まっていく。

5歳児 7月

手洗いをしている時に、石鹸の香りや水の気持ち良さを改めて感じた。泡のイメージから「綿あめみたい」「生クリームにも見える」「つくってみよう」と、おろし器で削った石鹸の粉と水を自分達で量を調整しながら、泡立て器やボウルなど、必要なものを探して泡づくりがはじまった。「もっと粉入れてみたら?」「早く混ぜるからボウル押さえといて」「じゃあ10数えて交代しよう」と、友達と役割を決めながら遊んでいると「みて!このふわふわ上から落ちててもふわふわやで」「ほんまや。壊れないように守っとくわ」「そーっとやで」と、友達と話をしながら楽しんでいた。

<心が動いたきっかけ>

・泡からイメージして、これまでの経験から「つくってみよう」と、考えたこと



<他者から見た心が動いたきっかけ>

・役割分担しながらも3人が同じイメージをもって、泡をみていること

<考察>

心を動かすきっかけとなる環境は、生活のあらゆる場面でたくさんあると感じた。5歳児では、遊びを通して、友達という人的環境が、心を動かすきっかけのひとつになっていることがわかった。表情、思いや考えを保育者が丁寧に受け止め、子どもの気づきに柔軟に対応することが大切であると学んだ。

5. 研究の成果

今年度、写真の見取りの際に、出た意見の中から、「自分が考えた子どもが心を動かしたきっかけ」と「他者が考えた子どもが心を動かしたきっかけ」に分けて、シートを作成した。分けることで、自分だけでは気付けなかった新たな気付きが明確になり、学びが深まった。さらに、シートを活用することで、写真の見取り後も、もう一度振り返ることができた。

子どもが主体的にものかかわっていきけるような、物的環境を整えることは保育の基盤であるが、まずは保育者との信頼関係が土台にあり、その人的環境の上に物的環境が活かされることがわかった。幼児期になると、保育者という人的環境だけでなく、友達という人的環境の存在も大きくなっていく。それを踏まえながら、保育者は子どもの心の動きに瞬時にかかわることが大切であることを学んだ。

6. 今後の課題

心の動くきっかけは、ものや環境だけで生まれるものではなく、保育者や友達といった人的環境が大きく影響していることがわかった。より多くの保育者の視点や意見を共有しながら、多角的に子どもの姿を見取り、子ども理解を深めていくことで、人的環境の質を高めていきたい。

次年度は、人的環境を大事にしながら、子どもが主体的にものやことに、かかわる姿に着目していきたい。